

のため、2014年9月までに約6億円を投じて本社工場を増強する。同工場を現在比約30%増築し、大型部品を高精度に加工できる門型マシンングセンター(MC)1台

手がける。13年11月期の全体の売上高は22億円の見込み。近年、有機ELパネルの需要が拡大しており、製造装置の需要も増えている。同社は新規設備の導入により、受注

る。金属の熱変位や加工軸の位置ずれを電子制御で自動補正する機能も搭載、加工精度を高めた。同社が加工する部品は、有機ELパネル露光装置のフレームと呼ばれる



トヨタ自動車はパーソナルモビリティ(PM、1人乗り移動ロボット)「ウイングレットII写真」の開発に力を入れている。2本のタイヤを備えたボディ



製品化へ実証試験

歩行者との親和性や走行安全性を検証する。PMの事業化では規制の緩やかな中国が先行する。自動車大国である日本としても、早期の事業化が求められている。(金曜日に掲載)

現場をゆく

▷68

メカルアルマダジャヤ・タンブシ工場

自動車産業が急成長するインドネシア。現地サプライヤーの技術向上も著しい。プレス部品メーカーのメカルアルマダジャヤ(MAJ)は同国最大手。タンブシ工場はジャカルタ中心部から車で約1時間の西ジャワ州ブカシ県にある。日系6社と取引があり、特にダイハツ工業向けが75%を占める。ブレイヨノ専務は「取引先のプロジェクト

でもなじみの深いスペースが随所に見られる。社内研修のための道場は、製品知識や安全意識の啓発、技能研さんに常時活用されている。また前日の生産を基に改善を話し合う朝会用の会議室もある。カイゼン、QCCも工場風土として根付

身につけさせたい」と指導に熱がこもる。

この秋からMAJでは伊藤製作所(三重県四日市市)との合併事業も始動。従来、一つのパネルを5-6工程で作っていたが、一つの型でコイルからパネルまで形成する順送プレスに取り組み。さらに14年には、コマツ製大型タンデムプレス4台の導入や情報投資を実施。13-14年の投資は20億円超におよぶ。

メンテ技術に磨き

会長時代の2006-07年に3度、同工場を訪れて金型・設備保全の重要性を指導した。プレス部品の品質は、車両組み立て時の溶接精度にも影響する。技術を磨くことで取引先の品質向上や原価低減にもつながった。工場内には日本の工場

これらを指導するのは完成車メーカーを退職した日本人金型技術者。第二の人生で、インドネシア自動車産業発展の基盤づくりに寄与したいと使命感に燃える。メンテナンステクニクは経験がモノを言うもの。「時間をかけて

も新工場や能力増強を次々に計画している。ブレイヨノ専務は「国際競争力のある会社になりたい」と将来を見据える。

(大阪・小林広幸)
(金曜日に掲載)

機械・ロボット